

女性がん患者に対する経口抗がん剤の処方動向

齋藤 翔太¹⁾、田中 美幸²⁾、杉山 純子³⁾、佐藤 展宏⁴⁾、前田 守⁵⁾、長谷川 佳孝⁵⁾、
月岡 良太⁵⁾、森澤 あずさ⁵⁾、大石 美也⁵⁾

- 1) 株式会社インファーマシーズ 幸生堂調剤薬局 松栄店
- 2) 株式会社インファーマシーズ エイト薬局 あすか台
- 3) 株式会社インファーマシーズ アイン薬局 豊橋東店
- 4) 株式会社インファーマシーズ
- 5) 株式会社インホールディングス

【目的】がん種の罹患率には患者特性も大きく影響し、それぞれのがん種の治療に特化した経口抗がん剤の開発なども行われている。薬局薬剤師の外来がん化学療法への関与が求められるなか、高度薬学管理機能の発揮に向け、これらの知識の習得や現状の把握が重要である。そこで本研究では、患者特性の一つとして性別に着目し、まずは女性に対する経口抗がん剤の院外処方状況を調査した。

【方法】2017年1月～2019年10月の期間に、当社薬局598店舗が応需した処方箋37,918,955枚に関して、YJコード上で腫瘍用剤に分類されている経口抗がん剤について、女性における処方動向を調査した。その際、30歳以上60歳未満(I群)と60歳以上(II群)の2群に分け、年齢による処方動向を比較した。

【結果】女性患者の全処方箋応需枚数は全期間を通じて大きく変化しなかったが、経口抗がん剤を含む処方割合は、1.19%から1.33%まで増加した。作用機序別の処方割合は、I群、II群ともにホルモン療法剤(74.2%、52.4%)、代謝拮抗剤(16.5%、31.9%)、分子標的薬(7.0%、13.4%)の順であったが、分子標的薬の処方は経時的に増加した。分子標的薬では、両群ともチロシンキナーゼ阻害剤が最も多かったが、2017年12月からCDK4/6阻害剤、2018年4月からPARP阻害剤の処方が増えたことで、I群は79.4%から29.7%、II群は81.1%から56.4%まで減少した。

【考察】本結果から、女性がん患者の外来治療は増加傾向であることが示された。また、分子標的薬の処方に増加傾向が見られ、その原因の一つがCDK4/6阻害剤やPARP阻害剤など新規治療薬の上市であることが示された。これらは乳がんに対する新規治療薬であることから、その傾向は特に乳がん好発時期のI群で顕著であることが示唆された。薬局薬剤師は高度薬学管理の発揮に向け、本調査で得られた知見のように、新規抗がん剤の上市タイミングとその影響を常に意識し、最新の知識の取得に努めることも重要と考える。

(第30回医療薬学会年会(2020年10月, Web開催)にて発表, 一部要約)